

プロローグ

精緻を極めたステンドグラスがはめ込まれた窓からは、春の柔らかな陽射しが射し込んで聖堂を照らす。

ゆつくりと私の隣を歩くのは夫となる人——エドワード・ルイス公爵だ。

エメラルドのように透き通った碧色の瞳。形のよい桜色の唇には、どこか人好きのする笑顔を浮かべていて、見る者を魅了せずにはいられない。

完璧なカーブを描いた卵形の顔。滑らかな陶器のような白い肌。陽射しを受けて眩く輝くゆるくウエーブがかかったプラチナブロン

ドは、シルクのように艶やかで、白皙の美貌を際立たせている。

すらりとした長身に真つ白なタキシード姿がよく映えて、会衆席に座っている参列者からは時折感嘆のため息が聞こえてくる。

「足は、痛くない？」

周りに聞こえないくらいの小声で耳元で囁かれ、小さく頷く。

歩き慣れない靴を履いているせいで時折よろける私を、氣遣つてくださっているのだろう。

純白のウエディングドレス。顔を覆うように被せられたレースのヴェール。頭上に輝く銀色のティアラ。この日のためにとメイドたちが総出で朝摘みの白バラを集めて作ってくれた、大きなブーケ。

祝福に満ちたそれらを身につける度に、罪悪感が増してゆく。

けれど、エドワード様の妻になる人間としてここに立っていられる

幸せを、手放したくないとも思う。

こんな思いを噛みしめることになるなんて、昨日まで想像だにしていなかったのに。人生というのは本当に分からないものだ。

（本当に……これでいいの？）

ちらりと、最前列に座っている両親の姿をみやる。お父様もお母様も、私が失敗しやしないかと固唾を吞んで見守っているようだ。

もう、私ひとりの意思ではどうにもならない。式は始まってしまったのだから。

祭壇の前へ立ち、神父様の前で誓約を交わす。

「――私達は夫婦として、病める時も健やかなる時も、生涯、互いに愛と忠実を尽くすことを誓います」

神父様がうなずき、厳かに告げる。

「では、指輪の贈呈を」

エドワード様が神父様から指輪を受け取り、私の左手の薬指に嵌める。

「今ここに、エドワード・ルイス公爵とスチュワート伯爵令嬢、アイラ・スチュワートの結婚が成立したことを宣言いたします！」

神父様が高らかに宣言すると、割れんばかりの拍手が聖堂内に響き渡る。

エドワード様が柔らかに微笑み、白い手袋を嵌めた私の手を取る。

「必ず幸せにするよ、僕のアイラ」

私は精一杯、世界一幸福な花嫁として満面の笑みを浮かべてみせる。

——身に纏っている純白の衣装も、純潔を意味する白バラのブーケも、聖堂中から寄せられる祝福の拍手も、本当は私のために用意され

たものではない。

私の名前はエマ・スチュワート。

——身代わりの、花嫁だ。

第一章

(……本当に、結婚してしまった)

寝室の広いベッドに腰掛け、一人呆然とする。

婚礼後、ルイス家の庭で行われたガーデンパーティーで、諸侯からの怒濤のような挨拶攻撃をどうにか受け流し、エドワード様と共に屋敷へ戻った。

その間はただ必死で、何も考えずにいられたから良かったのだけだ。

(これから私は……アイラお姉様として過ごさなくてはならないんだ)

その重責が身体にずん、とのし掛かつて胸が詰まりそうになる。

——双子の姉、アイラが、置き手紙を残して結婚式前夜に姿を消した。

名家・ルイス家の当主であるエドワード様との婚約は、私たちがまだ十歳にもならない頃に決まっていたことで。

アイラお姉様もそれを名誉なこととして受け入れていると誰もが信じて疑わなかったので、まさに青天の霹靂だった。

手紙には、家に入入りしていた庭師のジャックと愛し合っていること。伯爵家令嬢の身分を捨て、彼と共に名もなき庶民として暮らしていきたいこと。規律に縛られた貴族の生活から自由になりたいとずっと願っていたことなどが綴られていた。

自分のことは死んだと思つて忘れてくれ、と締めくくられたその手紙を読んで、お母様は失神しそうになつた。

「おお……神よ……」

お父様は眉間に深い皺を刻んで腕を組み、せわしく足踏みを繰り返している。

「勝手な真似を……！ 草の根分けても探し出せ！」

「かしこまりました。しかし、式はいかがしましょう？ さすがに明日までにアイラお嬢さまを見つけるのは難しいかと……」

執事が困り果てたように言うと、お父様は深いため息をついた。

「今さら延期も出来ないだろう。……エマ。お前がアイラの代わりに式に出ろ」

「わ……私が……？」

部屋の間で皆の様子を伺っていた私へ、父がうんざりしたように告げる。

「双子のお前ならアイラと瓜二つだし、数日程度なら誤魔化せる。アイラが見つかり次第、こつそり入れ替わればいい」

「そ、そんな……公爵様を騙すような真似を……？」

「他に方法はないだろう。こんな事が知れたら、我が家の存続に関わる。なに、数日もすればアイラも貧乏生活に音を上げて戻ってくるに違いない。それまでの辛抱だ」

お父様はやけに優しい声音を使って、私の肩をぽんと叩いた。

「お前は嫁き遅れの役立たずなんだから、こんな時くらい協力してくれたっていいだろう？」

そう言われてしまつては、反論できない。私は黙つてこの提案を受

け入れるしかなかった。

（アイラお姉様……今頃どこにいるんだろう？）

アイラお姉様は、明るく社交的な性格で、いつも舞踏会では注目の的だった。

ダンスで軽やかに舞う様は、双子の姉ながら見とれてしまうほど美しくて。

だからこそ、ルイス家の妻に相應しいと認められたのだろう。

（私とは……何もかも正反對）

私は子供の頃から引つ込み思案で、ヒマがあれば部屋で本ばかり読んでいた。

うつむき加減で猫背気味な私は、よくお母様に「しゃんとしないと

みつともない！」と叱られていたものだ。

『そつくりなのは顔だけね』と周りから陰で笑われていたことも知っている。

早々に婚約が決まったアイラお姉様とは裏腹に、私は適齢期を迎えても縁談がなかなかまとまらなかった。

私があまりにも陰気で話が盛り上がらないので、お相手の方に敬遠されてしまうのだ。

そんな私をお荷物だと感じているのか、両親からも冷たく当たられていた。

でも、仕方ない。

私は本さえ読んでいられたら幸せなのだと、そう言いきかせてきたのに――

（まさかこんな形で、エドワード様と過ごせる日が来るなんて）

私にとって、エドワード様は初恋の人だった。

アイラお姉様とお茶会のために屋敷を訪れたエドワード様は、庭の隅でひとり本を読んでいた私に、優しく話しかけてくれた。

『何を、読んでいるの？』

『あ……あの……ジュリア・オールウェルの【風の吹く丘で】を……

』

『奇遇だね、僕もその本が大好きなんだ』

『……！　そうなんです。読書がお好き……なんですか？』

『うん。でも大衆小説なんて低俗だって両親にはよく思われていない。だからこつそり読んでるんだ』

『わ、私も……です……』

それから私たちは、小説についてしばし語り合った。

互いに話は尽きず、こんなにも自分はお喋りだったのかと驚いてしまふほどだった。

『——それにしても、まさか【風の吹く丘で】を読んでる人に出会えるなんてね。エレノアが死の間際にヒースへ告げて言葉は感動的だったね』

『は、はい……えつと、このページですよね』

パラパラとページをめくって、そのシーンを探そうとすると――

『……あれ？』

本のページにパールブルーのリボンが挟まっているのを見て、エドワード様が怪訝そうな顔をした。

『どうして、リボンがここに？』

『あ……栞、がなくて……代わりに、髪を結ぶためのリボンを使っているんです』

あまりにも貧乏くさかっただろうか。

エドワード様はみつともないと軽蔑しているに違いない。

恥ずかしさでうつむいていると、エドワード様が上着のポケットから銀色のブックマークを取りだし私の手のひらに載せた。

『では、これを使うといい』

『……！　そ、そんな……エドワード様がご本を読むとき、困るのでは』

『では、君のリボンと交換だ。素敵なかからとても気に入ってしまったね。良かったら、譲って貰えると嬉しい』

『こ、こんなもので良ければ……!』

真っ赤になって、俯きながらリボンを手渡すと、エドワード様は微笑んで受け取ってくれた。

『ありがとう。大切にするよ。……エマ』

あの時の笑顔がずっと忘れられなくて。

アイラお姉様の婚約者と分かっている、心の中で想うのは自由だとずつと恋い慕ってきた。

私は一生、そうしてひっそりとエドワード様に焦がれながら朽ちてゆくのだと思っていたのに。

(幸せすぎて……怖い)

婚礼道具に紛れさせてこっそり持って来た【風の吹く丘で】を取り

だしぱらぱらとめくり、挟み込んでいるフクロウのモチーフがついた、銀色のブックマークをじっと見つめる。

エドワード様はもう、私にこれを渡したことなんて忘れてしまっているかもしれないけど。

私にとっては一生の宝物だ。

アイラお姉様の代わりでもいい。エドワード様のおそばに、ずっといられるのなら。

カチャリ。

そつとドアが開く音が聞こえたので、慌てて本を閉じサイドボードの引き出しにしまう。

部屋着に着替えたエドワード様が、部屋へ入ってきた。

「やれやれ。ようやく気詰まりなイベントが終わったね。君も疲れた

だろう？ 明日はゆつくり休むといい」

「……ありがとう、ございます」

うつむき加減でぎこちなく微笑むと、エドワード様は心配そうに私の顔をのぞき込んだ。

「どうしたの？ なんだか、いつもより元気がないね」

「……っ、し、式の間緊張していたので……気が抜けてしまったのかもかもしれません……わ」

慌てて笑顔を作り、アイラお姉様の口調を真似て答える。

そうだった。アイラお姉様は舞踏会でぶっ続けでダンスをした後もニコニコしてお喋りするくらいのバイタリテイの持ち主なのだ。

（体力のない私とは大違い……）

「挨拶回りも大変だったしね。でも、僕の妻として完璧な振る舞いだ

ったよ。さすがアイラだ」

屈託なく笑いかけられると、嬉しさと共にちくりと胸が痛む。罪悪感と恥ずかしさで、顔が上げられない。

エドワード様は、私をアイラお姉様だと信じ込んでいる。

私は……彼を騙しているのだ。

「これからは、ずっと君と共に過ごせるなんて夢みたいだ」

私の横へ座り、髪をそつと撫でる。

思わずビクッと身をかたくしてしまった。

「……ごめん。もしかして触られるの嫌だった？」

「い、いいえっ。突然だったのでびっくり、して……」

「そうか。でも、婚前講座の時は手を繋いだりキスしてもなんともなかったのに」

(キ……キス!?)

そんな話は聞いていない。

この地方の風習で、婚約中の男女が結婚後に戸惑わないよう講師について、夫婦の間でのしきたりを学ぶことは知っていたけれど。

まさかキスまでしていたなんて。

(私が思っていたより、婚前講座というのは先進的なのかしら……?)

「ごめんなさい。本当に私、疲れているみたいで……でも、けつして嫌ではなくて、その……」

「うん、分かっているよ。でも……初夜はきちんと迎えたいな。夫婦としての初めての営み、なんだし」

「……………」

そうだった。お父様に命じられた時にはアイラお姉様の代わりに式に出るだけだと思い込んでいたけれど。

夫婦となったからには、エドワード様と契らなくてはならないのだ。
(どうしよう……！)

ガチガチに身を固くしている私の肩を、エドワード様が背後からそつと抱き寄せる。

「緊張しているのかな？ 可愛いね」

うなじに顔を埋め、すう、と匂いを嗅がれる。

吐息が首筋にかかる、ぞく♥とお腹の奥が小さく引きつる。

「エ、エドワード……様、そ、その……」

「大丈夫。力を抜いて？ 全部僕に任せて……」

エドワード様はもじもじしている私の顎をとらえ、そつと唇を寄せ

た。

「ん……ちゅ……っ、は……んう……♡」

ちゅ、ちゅつと唇を軽く吸われ、頬を撫でられる。

（エドワード様とくちづけを交わしているなんて……夢みたい）

恋愛小説で読んで想像していた口づけそのまま、その心地よさに頭がぼうつとしてくる。

「ふふ……キスだけでうっとりして、可愛いね」

エドワード様が私の唇を食みながら、指を顎から首筋に這わせる。

細くしなやかな指が触れるたびに、ぞくっ♡と腰に甘い衝撃が走った。

（何これ……♡ただ触れられているだけなのに、なんだか身体がすごく熱くなつて……っ♡）

今エドワード様の目に映っているのは、アイラお姉様を演じている私。

『エマ』が愛されているわけではない。

分かっているけれど……それでも、エドワード様に触れられるとたまらなく嬉しくなってしまう。

指先はネグリジェの胸元へ降り、確かめるようにやわやわと乳房を下から持ち上げられる。

「あっ……♡」

「下着をつけていないんだね。……って部屋着姿だから当然か。でも、嬉しいな。僕の前でそんな無防備な姿をさらけ出してくれるなんて」

かりっ♡かりっ♡

乳首をネグリジェに引っ搔かれ、くつと喉を反らせて唇を噛みしめ

る。

「……っふ……♡は……んう……♡」

「必死に堪える姿も愛らしいね。でも……我慢しないでいいんだよ？
可愛い喘ぎ声を、僕に聞かせて……？」

きゅっ♡と盛り上がりはじめた乳首を摘まれ、「ひうん♡」とむずがるような声をあげてしまった。

「君は子猫みたいに可愛く鳴くんだね。フフ……もつとえっちに鳴かせたくなっちゃうな」

乳首を指で挟み込み、ネグリジェごときゅう♡と持ち上げてぷるぷると揺らされる。

やや透け感のあるネグリジェ越しに伸びた乳首がうつすら見えて、羞恥を煽られてしまう。

「ひう♡んっ……♡はっ♡あああ……♡」

「もう乳首がこりこり♡に硬くなっているね。興奮、してるの？」

「こ、興奮だなんて、そんな……あっ……♡」

ネグリジェの肩をずるん♡と引き降ろされ、乳房が露わになる。

ぷるぷると恥ずかしげに震えている乳房を手でそつと覆い、エドワード様が耳元で甘く囁いた。

「綺麗なおっぱいだね。想像通りだ」

かりっ♡かりっ♡

今度は直に指で乳頭を引っ搔かれ、ずくんと甘い疼きがお腹に落ちる。

快感に頭が支配されて、気を抜くと素の自分をさらけ出してしまいうそで怖い。

（こんな時、アイラお姉様ならどんな反応をするんだろう）

……分からない。分かるはずがない。

だって、男女の交わりのことなんて、あけすけに話せる間柄ではなかったし。

（そうだ……官能小説を参考にすれば、いいのかも）

興味本位でこっそり懇意にしていたメイドに頼んで取り寄せた、官能小説の内容について思いを馳せる。

（確か、女性はたくさん喜んで、求めていた気がする……）

「エドワード……様……いい、いいわ……も、もつとして、ください

……」

ぎこちなく、うろ覚えの台詞を口にする、エドワード様がぷつと吹きだした。

「フフ、なんだかお芝居の台詞みたいだね」

「……っ、あつ、も、申し訳ございません。こ、こういう時の作法が分からず……」

「作法なんて、気にしないで。僕に身体を委ねて、感じるままに反応してくれたらそれでいいんだ。ね。ほら……君のおっぱいはもう、こんなに悦んでくれているんだから」

ぴん♡と乳首を指で弾かれて、「ひゃうう♡」と思わず高い声が出て仰け反ってしまった。

「乳首が好きなんだね。もつと可愛がつてあげる」

むにっ♡とおっぱいを揉まれ、手の中で転がされながら、乳首の根元を指ですりすり♡と円を描くように撫で回す。

かと思うと乳頭を指腹でくにくに♡と押し込まれ、ぐにいと乳首

を横に押し倒したり。

自在に動く指に翻弄され、いつしか甘い吐息が唇から零れていた。

「ふぁ……♡エドワード……様……♡私、変、です……♡なんだか、お腹の奥がすごく熱くて……♡ナカが灼けてしまいそうで……♡♡」

「僕の愛撫でしっかり感じてくれているんだね。嬉しいな。そんなに腰をくねらせておねだりされてしまつては、応えないわけにはいかないな」

エドワード様の手が下半身に伸び、くるぶしまである長いドレスの裾をめくる。

ドレスがさざ波のようにベッドの上に広がり、太ももが露わになった。

「……………あ……………っ♡」

くっ、と下腹部の辺りを手のひらで押されると、お腹にエドワード様の体温が伝わってじわっ♡と熱くなってくる。

「ここが、君と僕の赤ちゃんを作る部屋がある場所だよ。覚えておいて?」

「は……………はい……………♡」

さすさす♡と温かな手にお腹をさすられているだけなのに、お腹の熱がどんどん広がって、なんだかじんじん♡疼いてくる。

（そうだわ。婚姻をしたからには……………エドワード様と子作りをしなくてはならないんだ）

そして子を為すためには、セックスをする必要があつて……………

これからそれを行うのだという実感が今さらながら湧いてきて、ず

くんとお腹が疼く。

（私がエドワード様と……セ、セックスをするなんて……）

『アイラ』として交わるのだと分かっているけれど、エドワード様は私にとって初恋の人なのだ。

たじろぐな、という方が無理な話だ。

（ああ……ど、どうしよう……）

すつ、と太ももに手を差しこまれ、反射的にきゅつと閉じてしまう。まるで拒んでいるように思われただろうか。

「……ごめんね。もしかして……怖い？」

エドワード様が少し困ったように首をかしげる。

彼をがっかりさせてしまった……

慌てて首をふるふると横に振る。

「も、申し訳ございません……なにぶん、初めてなもので……」

「そうだよ。初めての夜……だからね。緊張するのは当然のことだよ」

エドワード様は、口元を緩ませて微笑む。どことなく嬉しそうに見えるのは、気のせいだろうか？

「だったらゆつくりと身体をほぐして、子作りのための支度をしよう」

すりっ……♡

ショーツごしに割れ目を指がたどり、上のところでぴたりと止まる。膨らみを確かめるようにキワをゆつくりとたどられるとぞわぞわっ

♡と寒気に似た感覚が腰の辺りから這い上ってきた。

「ここ、なんだか知ってる？」

「わ、わかりま……せん……」

震える声で答える。

陰部は赤ちゃんを作るために、おちんぽを挿入するところだというのは知っているけれど。

自分の身体なのに触れたこともろくになくて、どういう仕組みなのかすら分かっていないのだ。

「ここは、ね。クリトリス、って言うんだよ？ 男性のちんぽに当たる部分なんだ。覚えておいてね？」

「は……はい……」

「ちんぽと同じくらい、クリトリスって女性にとって感じる場所なんだ。こうやって指で刺激してあげると——」

かしっ♡かしっ♡

指先で軽くクリトリスの先っぱを弾かれると、びりびりっ♡と痺れるような感覚がお腹の奥へ響いてきた。

「っああっ♡♡」

「フフ、すっごく気持ちいいだろう？ もっとしてあげるね」

ぴんっ♡ぴんっ♡

下着越しに何度も指で陰核を叩かれ、びくびくっ♡とはしたなく腰が揺れてしまう。

「だんだんぷっくり♡膨らんできたね。クリトリスもね、ちんぼみたいに充血して勃起するんだよ？ こうやってこしこし♡根元から擦ってあげると……」

下着を僅かに盛り上げる淫芽の膨らみを浮き立たせるように、爪で根元のキワをくにくにつ♡とほじる。

陰核の溝から太ももへ刺激が伝わり、勝手に膝がかくんと曲がつて、つま先がガクガク震えてしまう。

（何これっ♡こんなの知らないっ♡　だめっ♡どんどん頭がぼーっとしてくるっ♡）

初めて知る女の快感は、受け止めるには大きすぎて。

理性が蕩かされて、自分を保てなくなりそうで恐ろしい。

「エドワード……様……っ♡私……♡怖い、です……っ」

「怖い？　どうして？」

「自分が自分で……っ♡なくなり、そうで……っ♡」

「フフ、それでいいんだよ。理性をかなぐり捨てて本能で交わることこそ、真に愛し合うことが出来るんじゃないかな？」

くにつ♡くにつ♡

痛いくらいに勃起したクリトリスが、形がくつきり♡分かるくらいに浮き上がっていて。

気がつけば股間はおもらしをしたみたいに、びっしりと湿り気を帯びている。

（ずっと、おまんこから熱い体液が出てるっ♡このまま私っ、体液を出し過ぎて干からびてしまうんじゃないかしら……♡）

腰は勝手にくねって、もっとしてして♡とでも言いたげに、股間をエドワード様の指へ押しつけている。

自分がこんなに淫らな女だったなんて……

くに、と指先がショーツのクロッチに押しつけられると「あっ♡」と上ずった声が漏れてしまった。

「アイラは濡れやすいみたいだね。もう下着がえっちな汁でびしょび

しよじゃないか」

エドワード様が私の分泌液で湿った指先をじつと見つめる。

恥ずかしきで、きゅつと身を縮こまらせてしまった。

「あ……っ……も、申し訳ございません……♡こんなっ、はしたない女で……っ♡」

「怒ってるわけじゃないんだよ？　むしろ、初めてなのに僕の愛撫でこんなに感じてくれるなんて、よく出来た妻だなんて感心してるんだから」

「……っ、か、感心……？」

「そうだよ。だって愛する人には気持ち良くなつて欲しいじゃない？　心をこめた愛撫に答えてくれるなんて、こんな嬉しいことはないよ」

「……………」

（エドワード様が私のために……真心をこめて愛撫をしてくださっているんだ……）

たとえ『アイラ』としてでも、私はエドワード様に心から愛されている。なんと幸せものなんだろう。

「だから、もつと君にはたくさん感じて、乱れて、えっちな姿を僕に見せて欲しいな」

するり、とショーツが脱がされ、下半身が露わになる。

エドワード様が私の股間をのぞき込み、屹立する淫芽へ熱い視線を注いだ。

「やつぱり、皮を被ったままだったね。淑女のたしなみとして、ちゃんと剥いておかねえとね」

「た……たしなみ……ですか？」

「フフ、そうだよ？　僕の妻となる女性には、つるんと剥けた美しいクリトリスでいて欲しいからね」

エドワード様の指先が、クリトリスの先端に添えられる。

そのままぐぐつと皮を押し上げると、ぷりんっ♡と剥き身が飛びだしてきた。

「……っ♡ふぁっ……♡」

ぶるっ♡と腰が大きく震える。

ただ空気にさらされただけなのに、剥き出しの肉芽がツンと痺れて、きゅっ♡とお腹の底が縮み上がった。

「綺麗に剥けたね♡お利口なクリトリスだ♡たくさん可愛がつてあげるからね」

クリトリスをよしよし♡するように、裏筋をつつ♡と撫で上げる。

触れるか触れないかという柔らかいタッチなのに、雷に打たれたみたいにビリビリ♡と痺れて、ぴーん♡と足を逸らせてしまった。

「……っ♡、おおおッ♡」

（わ、私ったらなんて下品な声を……!）

こんな獣じみた声、エドワード様に軽蔑されてしまう。

慌てて口を塞ごうとしたのだけれど、エドワード様に手首を掴まれ止められてしまった。

「どうして、口を塞ぐの？」

「し、淑女にあるまじき、下卑た声をあげてしまったので……」

「むしろ、もっと聞かせて欲しいくらい素敵な喘ぎ声だったよ？ 君

のメスの本能が発した声は、たまらなく魅力的だ」

エドワード様がうっとりした顔で言う。

どうやら、社交辞令や慰めではないらしい。

（こんな声を素敵だなんて……エドワード様ってなんて懐が深いお方なの）

「だから、ね？ もつとえつちな声を聞かせて……♡」

とんっ♡とんっ♡

指腹でみちみち♡に膨らみきつたクリトリスを叩かれ、「おっ

♡」と卑猥な声が漏れてしまう。

足はがに股に開き、触ってください♡と言わんばかりに腰を突き上げて自分から肉芽を指に擦りつける。

「ああ、自分で気持ち良くなれるところを探してるんだね♡アイラは

いい子だ♡」

エドワード様が蕩けた眼差しで私を見つめる。

欲情の色が浮かんた視線に晒されるだけで、身体が熱くなっておまんこからとろっ……♡と淫らな汁があふれ出す。

（やだ……っ♡私、こんないやらしい女だったなんてっ……♡）

まるで自分が自分でなくなっていくようで怖い。

夫婦の営みって、もっと事務的に行われるものだと思っていたのに。

「さあ、次はおまんこの中を、たっぷり可愛がってあげようね♡」

エドワード様がむにとクリトリスを指で挟んだまま、空いた手で淫唇をくぱあ……♡と割り開いた。

「ほら……♡ここで僕のちんぽを呑み込むんだよ？ 今からしつかり柔らかくしておかないとね」

くぱ♡くぱ♡と何度も指でおまんこの入り口を開いたり閉じたり繰り返される。

ぬち♡ぬち♡と粘膜が擦れる音がやけに淫らに響いて。

もじもじとつま先が丸まってしまう。

「ふふ、ピンク色に充血して、物ほしそうにくぱくぱ開いて……えっちだね……♡」

「ひっ♡は……あ……♡っ、あ……♡」

外気に晒された淫肉を指がぐにぐにとこね回す。

クリトリスと肉唇をくちやくちやに揉みしだかれて、蕩けて混ざり合ってしまったいそうだ。

「もうトロットロだね♡指一本くらいなら、入りそうかな」

っぷりっ♡

細くしなやかなエドワード様の指が、ぬかるんだ花芯へ呑み込まれる。

「ひう……♡」

「ぷりぷりで可愛いおまんこ肉だね。じっくりほぐして、初夜に備えようね」

くにつ♡みちみちっ♡

ぴつたりと閉じた膣筒を指で押し広げられ、幾重にも重なり合った花卉をめぐりあげて秘奥へ進む。

「小さくて、狭くて、きつちきちで……でも頑張つて僕の指を受け入れようとしてくれるんだね。健気なおまんこだ……♡」

っぽ♡っぽ♡っぽ♡

指先が膣口を浅く出入りし、異物を馴染ませようと緩やかにナ力を

かき回す。

熱く潤んだ媚肉がくちやくちやと蕩けて、じんわりと快い痺れが広がってゆく。

ゆつくりとナカを拡張しながら、指先は膣筒を這い進む。

「っあ♡ひ♡はう……♡んう……♡」

お腹の裏のざらついた部分を指で引っつかかれ、きゅうん♡とおまんこがびつくりして縮み上がった。

「ひゃうう♡♡」

「フフ、ここ感じるよね。おまんこが嬉しい♡♡って吸い付いてくる」

ぞりっ♡ぞりっ♡

指腹が肉襞に押しつけられ、ナカを揉むようにぐちぐち♡と小刻み

に揺れる。

それと同時に、クリトリスに添えた親指が饒舌に蠢き、ぷちっ♡と肉芽の芯ごと押し潰してぐりぐりっ♡と揉みほぐす。

暴力的なほどの快感の波が押し寄せてきて、一気に私をさらって高く打ち上げる。

息が出来ないほどのめくるめく愉悦に、ただ私は腰をへこつかせて「はぁ♡はぁ♡」と淫らな吐息まじりの喘ぎ声を発するしか術はない。「うぁ♡エドワード……様っ……♡私っ、何か変ですっ♡おまんこの奥がっ♡きゅんきゅん♡してっ……♡」

「アイラは、自分の指でココを触ったことはないの？」

「ありま……せん♡こわく、て……ふぁあ……♡」

「ふふ、可愛いなあ……♡大丈夫だよ、おまんこがちんぽを受け入れ

る準備をしているだけなんだ。こうやってたっぷりマッサージして、もつと柔らかくしてあげようね♡」

とんとん♡とぼつてり膨らんだ肉天井を軽く叩かれ、腰が大きく跳ね上がった。

「……っ♡ひうううううんっ♡」

こりっ♡こりっ♡

ぱっぱっに膨らみきった肉芽を親指の腹で弄り倒され、ナカと外から気持ちいい♡が溢れて身体中を駆け巡る。

きゅうっ♡とお腹の底が絞られてるみたいによじれて、おまんこ全体が沸騰したみたいになわつと熱くなつてゆく。

「っひ♡やっ……♡だめですっ♡それ以上はっ……♡きゅんきゅん止まらなくてっ♡お小水でちゃ……っ♡」

「ふふ、もうイキ方を覚えたの？ えらいな。大丈夫だよ、我慢しないでこのままイっちゃって？」

「っ♡あっ♡あっ♡ひう♡う♡あああゝっ♡」

ぱちん♡と限界まで膨らんだ快感の塊が身体の奥で弾けて――

視界が真っ白になって、びくびくっ♡と身体が跳ねる。

ふしゅっ♡

おまんこから、温かい水のようなものが吹きだして――

気がついた時には、シーツがぐっしりと濡れて水たまりをつくっていた。

「あ……あ……も、申し訳ございません！ わ、私……シーツに、粗相を……」

くすくす、とエドワード様がいたずらっぽい笑みを漏らして私の唇

に人差し指を当てた。

「安心して。これはお小水じゃなくて、潮だから」

「し、潮……？」

「女性が達した時におまんこから出るものなんだ。君が僕の指でしっかりイってくれた証拠だから、むしろ勲章なんだよ」

そういえば、官能小説にそんな描写があつた気がする。

（でも、まさか自分がこんな風に乱れてしまうなんて……恥ずかしい……）

「……痴態を晒してしまって、申し訳ございません」

「もう……謝る必要なんてないのに。本当に君は真面目だね。——エ、マ」

「……っ！」

身体の中でくすぶっていた熱が、すつと引いてゆく。

「な、何を仰っていますの？ 私はアイラですわ」

「もうアイラのフリなんてしなくていいんだよ、エマ。君が彼女の身代わりだってことは、式の時から分かっていたんだから」

背中に氷を突っ込まれたような気分になった。

まさかそんなに早く、気づかれていたなんて。

「……どうして、分かったんですか？」

絶望に打ちひしがれて、うつむく。

私達は見た目だけは瓜二つで、並んでいたら見分けがつかないと評判だったし、実際にアイラお姉様とよく間違えられていた。

だからお父様も、私を身代わりとしてエドワード様のもとへ寄越したのに。

「僕の目を、真っ直ぐに見てくれなかったことかな。アイラはこつちがたじろぐくらいにじつと見てくる子だったからね」

（……そんな些細な仕草で見抜くなんて。アイラお姉様を本当に良く見ていらつしやる）

きつと、それほどまでにお姉様を愛しているのだろう。

そう思うと胸が痛い。

こんなにもアイラお姉様を想つていらつしやるエドワード様を騙そうとしてしまった。

私はなんという罪を犯してしまったんだろう。

「それと……婚前講座の件、かな。講座で学ぶのは、夫婦としてのあり方とか、愛についてとか、座学だけなんだよ。アイラなら一緒に受けたから、知っているはずなんだけどね」

「あ……っ」

どうやら知ったかぶりをしたばかりに、自分から墓穴を掘ってしまつたらしい。

いたたまれなさで逃げ出したくなる。

「申し訳、ございません……。姉は……。その……。行方不明になつてしまつて……。今、スチュワート家総出で探しております。見つけ次第、姉がここへ参りますので……！」

震える手でネグリジェの裾を握りしめて必死に言いつのる。

どうしよう、どうしよう。全部バレてしまった。私が至らないせいで。

スチュワート家の名に泥を塗ってしまった。お父様とお母様のご期待に添えなかった。

何より、エドワード様を失望させてしまった。

何もかも、おしまいだ。

青ざめてカタカタと身を震わせていると、エドワード様が固く結んだ私のこぶしへ手を添えてきた。

「ごめんね。君を責めているわけじゃないんだ。僕は、たとえ身代わりだったとしても、君を妻として愛したいと思っている」

「……エドワード、様」

添えられた手の温かさに、涙が滲む。

『アイラ』としてでもいい。

彼の妻としてずっと傍にいられたら、どんなに幸せだろう。

けれど――

「ごめん、なさい……今日は……一緒に褥をとにもすることは……出

来ません……」

喉を振り絞ってそう言うのがやっとだった。

私がエドワード様を騙していた事実は消し去れない事実だ。

エドワード様が受け入れてくださったとしても、私が自分を許せない。

それに、彼が本当に愛しているのは——私ではなくアイラお姉様なのだから。

「……そうか、分かった」

エドワード様が静かにうなづく。

「……部屋へ、戻ります……」

立ち上がり、部屋を出る。

扉の向こうから、エドワード様の深いため息が聞こえた。

第二章

——翌朝。

一睡も出来ず、朝を迎えてしまった。

「僕は、たとえ身代わりだったとしても、君を妻として愛したいと思
っている」

エドワード様にそう言われて、嬉しかった。

けれど、彼を騙したという事実は一生消えない。

私はエドワード様を傷つけてしまった。

もし私に、アイラお姉様を演じきれぬ度量があれば、ずっと一緒に

いられたのに。

(……もう、ここにはいけない)

スチュワート家へ帰ろう。

お父様とお母様には、きつと叱られてしまうだろう。けれど私が『エマ』だとバレてしまった以上、ルイス家にいる理由はない。

手早くトランクに荷物をまとめ、着替えて支度を済ませる。

丁度白いモスリンのシュミーズドレスを持って来いたので、それを着ることにした。

胸下で切り替えたエンパイア・ラインのこのドレスはゆつたりとしたシルエツトでコルセットも必要なく、身動きが取りやすい。

胸元が露わになつていたので両親には下着のようで下品だと叱られそうだが、メイドを呼ばず手早く着替えるにはこれしかない。

上からマントを羽織れば誤魔化せるだろう。

（少し歩くけど、街まで出れば馬車を呼べるはず）

家まで帰る算段をつけ、そのまま城を出ようとしたところで、はたと気がついた。

（……！ 本を寝室に忘れてきてしまったわ）

昨日寝室でエドワード様を待っている時に、【風の吹く丘で】をサイドボードの引き出しにしまったままであることを思い出す。

この時間なら、エドワード様は公務で外出しているか執務室にいらつしやるだろうし、こっそり持ち出せるだろう。

そう踏んで、そとと寝室へ入る。

引き出しにしまっていた本を抱えて、そのまま部屋を出ようとする
と、

「どこへ行くの？」

思わず、本を取り落としそうになってしまった。

まるで出口を塞ぐかのように、エドワード様がドアの前へと立っていたからだ。

「あ……あの……」

どう言いつくろおうかと目を泳がせていると、エドワード様がつかつかと私の前へやってきた。

「まさか、ここを出て行こうなんて考えていないよね？」

「……申し訳、ございません……」

「……どうして？ 僕はこのまま夫婦でいても構わないって言ったのに」

「どうしても……良心が咎めてしまうのです。エドワード様はアイラ

お姉様を愛していらっしゃるのに、身代わりの私が妻で居続けるなんて欺瞞ではないのかと……」

エドワード様はぱちぱち、と目を瞬かせた。

「君は、大変な誤解をしているようだね。僕とアイラは、愛し合つてなどいないよ」

「……で、ですが、エドワード様は姉のことをよく見ていらつしやるではないですか。それこそ私がニセモノだと見抜くくらいに」

「ああ、それはね」

エドワード様が私の腰を抱き寄せて、囁く。

「僕が見ていたのは、君だからだよ」

「私……を……？」

どうということなのだろう。

私がエドワード様とお会いしたのは、たった一度だけなのに。

「まだ分かっていないみたいだね。僕が愛しているのは君だよ——エ

マ

「……!?